

# 言語人類学，エスノメソドロジー，会話分析 ーコミュニケーションの民族誌から相互行為の人類学へー

京都大学 高田 明

## 1 コミュニケーションの民族誌

言語人類学は、言語学と文化人類学を架橋する研究領域である。エスノメソドロジーと会話分析(EMCA)は、その変容と発展に大きく貢献してきた。本発表では、これまでの言語人類学とEMCAの関わりを整理するとともに、この学際的な研究領域をさらに発展させるための展望を言語人類学者の立場から述べる。言語人類学の理論的関心はきわめて多岐に渡る。そのうち、EMCAと関心の多くを共有しつつ、これとほぼ同時期に登場したのが、人類学の文脈の中で発話と言語の研究を行う「コミュニケーションの民族誌」という学際的なフィールドである(Hymes 1963:277)。この主張に共感したゴッフマンは、さまざまなフィールドにおいて集まりが始まり、進行し、終了する過程を分析的に描写していった。これを通じてゴッフマンは、ひと連なりの相互行為を念入りに分析する方がフィールドの歴史や各種の文化的要素を体系的・網羅的に記述していくよりも、その文化についての重要な知識をもたらしうることを示した(高田 2015)。ゴッフマンはそうした研究を進めていくうえで魅惑的な概念を数多く提唱したが、その中でも「参与枠組み」は、エスノメソドロジー・会話分析と関わり合いの深い研究テーマを構成するに至っている。

## 2 参与枠組み

参与枠組みという考え方は、それぞれの参加者が相互行為の進行に伴って、文化的ルールを参照しながら、その立ち位置を変化させ続けていることに目を向けさせる。さらに、相互行為における主体という概念を「今」「ここ」を越えた複数の声(voice)へと分解し、それらによって繰り広げられる日常生活の演劇性についての分析を可能にする。その例として本発表では、日本における妊婦をめぐる相互行為を分析した私たちの研究を紹介する。この研究では、生まれる前の赤ちゃんが相互行為に導入される際には、しばしばその参与枠組みが柔軟に変化することが明らかになった。これは、子どもが生まれた後の社会関係は子どもが生まれる前からすでに始まっていること、また妊婦の身体感覚は、相互行為の中で家族関係を(再)組織化するために有効に用いられることを示唆する。

## 3 相互行為の人類学

コミュニケーションの民族誌に端を発する言語人類学的なアプローチでは、フィールドワークを通じた参与観察を主たる研究手法とする、文化的多様性に立脚した考察を行うといった点で、関連する他の研究分野とは一線を画すユニークな研究領域を構成するようになってきている(cf. Enfield et al. 2014)。発表者は、こうしたアプローチを「相互行為の人類学」と呼んでいる。その大きな目的の1つは、研究対象となる社会的現象について確認される文化的な変異を、普遍的な人間性についての議論に回収されていない周辺的な残余物としてではなく、人間性についての理解のために中心的な位置をしめる現象だと見なしつつ、人間の社会性について問い直していくことにある。

## 文献

- Enfield, N. J., Kockelman, P., & Sidnell, J. (2014) *The Cambridge Handbook of Linguistic Anthropology*. Cambridge: Cambridge University Press.
- Hymes, D. H. (1963) Objectives and concepts of linguistic anthropology. In D. G. Mandelbaum, G. W. Lasker, and E. M. Albert (eds.), *The teaching of anthropology* (pp.275-302). American Anthropological Association. Memoir 94.
- 高田 明 (2015) 「ゴッフマンのクラフトワーク：その言語人類学における遺産」中河伸俊・渡辺克典(編)『触発するゴッフマン：やりとりの秩序の社会学』(pp.229-255) 東京：新曜社。